

〈論文〉

近代西安碑林における展示空間の変遷

～文物保護と博物館化

村松弘一

要約

清朝滅亡後、「博物館」は近代における新しい「中国」というまとまりを創出・維持させるための装置のひとつであった。古都・西安では博物館の創設は比較的遅く、文廟（孔子廟）の附属施設であった碑林が陝西省図書館の管理を経て、1944年によりやうく陝西省歴史博物館が開設された。本稿では碑林の博物館化の過程を展示空間・文物保護・文物の陳列といった観点から考察した。特に、①1906年「西安府文廟と碑林における古碑」（関野貞）②1908年『長安史蹟の研究』（足立喜六）③1914年『図書館所管碑林碑目表』（陝西図書館）④1935年『西京碑林』（張知道）⑤1938年『西安碑林碑石目録』（西安碑林管理委員会）⑥1946年『西京碑林蔵石目録』（陝西省歴史博物館）⑦2006年『西安碑林博物館碑刻総目録提要』（陳忠凱）の7つの資料を時期ごとに整理し、「大秦景教流行中国碑」、「昭陵六駿」、鴛鴦七志斎の墓志、西北芸術文物考察団の発掘品、西安新城小碑林などの文物（文化財）の収蔵過程と碑林の博物館化を論じた。

キーワード

近代西安 碑林 博物館化 展示空間 陝西省歴史博物館

1. はじめに

清末・辛亥革命以降、それまでの伝統「中国」のまとまりは崩壊し、近代における新しい「中国」というまとまりの創出・維持のための装置が必要となった。その装置のひとつが「博物館」であった。地下に多くの文物が眠る中国の古都・西安で最初の「博物館」は1944年に開設された陝西省歴史博物館である。清朝滅亡後、北京では1912年に国立歴史博物館、1925年に故宮博物院が開設され、南京では1933年に中央博物館籌備処が置かれたことから考えれば、西安における博物館の設立はかなり遅いと言えよう。その原因のひとつとして西安碑林・西京図書館・西京籌備委員会・陝西民衆教育館・陝西考古会・西北芸術文物考察団など複数の組織が個別に文物の発掘や保管をおこなっていたためにひとつにまとまらなかったことが挙げられる¹。近代においてどのような経緯で個別の文物が碑林に集まり、保管・展示されたのかを考えることは、西安における近代中国のアイデンティティーがどのように形成されたのかを知る上でも重要な作業であると思われる。

本論に入る前に、近代西安碑林の組織変遷史を今一度、簡単に振り返っておきたい（年表参照）。西

平成30年10月22日受理
むらまつ こういち：淑徳大学 人文学部 教授

安碑林の創建は、呂大忠が唐長安にあった開成石経を府学の北に移設した北宋・哲宗の元祐2年(1087年)にさかのぼる²。その後は清末に至るまで文廟(孔子廟)に附設する施設として管理された。1905年の科挙制度の廃止にともなう、孔子廟の荒廃、1911年の辛亥革命を経て、1912年、碑林は1909年に設置された陝西図書館の管理下に入る。陝西図書館はその後、1927年に陝西省中山図書館、1931年に陝西省立第一図書館、1937年に陝西省立西京図書館と改称された。南京国民政府成立後は文物事業が進展し、1928年3月には南京に古物保管委員会が設立され、1930年に古物保存法が成立、1934年には中央古物保管委員会が発足した。西安では、1932年に南京国民政府によって組織された西京籌備委員会(委員長は張継)と1935年に開設された中央古物保管委員会在西安弁事処(主任は黄文弼)が協力し、1937年から1938年にかけて西安碑林の大規模な改修工事がおこなわれた。改修後、1938年5月に発足した陝西省西安碑林管理委員会(主任委員は張鵬一・陝西考古学会会長)が図書館にかわって碑林の管理を担うことになる。さらに、1941年には重慶国民政府教育部の下で組織された西北芸術考察団(団長は王子雲)も陝西省で発掘や文物保護の活動を開始し、碑林を陝西省所在の石碑や出土文物の保護拠点になるよう言論を展開した。そして1944年4月の陝西省政府委員会第十次会議にて、西安碑林のすべての文物、西京図書館附設の歴史博物館の部分、西京籌備委員会の考古文物、陝西民衆教育館の工芸陳列品、陝西考古学会収蔵の古物、西北芸術文物考察団の文物を、西安碑林を基礎とした陝西省歴史博物館に移管することとなった。1949年の解放後は、1950年に西北歴史陳列館、1952年には西北歴史博物館、1955年には陝西省博物館、そして現在は西安碑林博物館として多くの観光客が訪れる文物展示施設となっている。

以上のように碑林から博物館への組織変遷史をまとめることができる。では、よりミクロな視点、つまり、展示空間の変遷や展示される文物の変化から、碑林変遷史がどのように見えるのだろうか。そこにはより細かな歴史観を垣間見ることができるとは違いない。本稿では近代西安碑林の展示空間と展示品の変遷を目録や調査報告から整理・分析し、その変遷の背景にある文物事業の展開および碑林の博物館化について論じたい。

2. 近代西安碑林の展示空間と展示文物の変遷

本節では西安碑林の調査記録・目録から、展示空間と展示文物の変遷を考えたい。現在、碑林には漢代から清代、民国期に至るまで約4000点の石碑・文物が所蔵されている。本稿ではそのなかでも特に価値の高い唐代以前に刻された石碑・石刻および唐代以前の碑をもとに宋代以降に摹刻された石碑に着目して考察したい。考察にあたっては、後述する資料①～⑦に基づき①1906年②1908年③1914

2



写真1 『西京碑林』(資料④1935年出版)

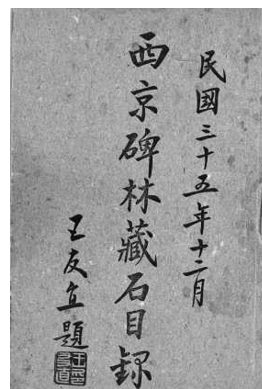


写真2 『西京碑林藏石目録』(資料⑥1947年出版)

年④1935年⑤1938年⑥1946年⑦2006年の7つの時期にわけて整理する。資料④・⑥は中国の古書店サイトを通じて著者が入手した原本(写真1・2)、資料①・②は日本人研究者の調査報告、資料③・⑤は路遠『西安碑林史』(西安出版社、1998年)で引用された一覧である。①～⑦の時期に展示された文物のリストおよびその展示位置についてまとめたものが表1である。左から番号・時代(王朝)・年代(元号)・西暦・碑名(文物名)、展示室および備考に分けて整理した。備考には碑林(文廟)に移設された時期、書人、重刻の時期と重刻者を記した。また、今回の論文では、まず、資料④・⑥の原本目録を手に入れ、この二つの目録を軸に整理し、その前後の資料を加えるという手順で考察をおこなった。そのため④⑥のセルは灰色でわかりやすく示した。また、唐代以前の石碑を後代に重刻した石碑についても唐代に作成された石碑と区別するため濃い灰色で示した。以下、資料の順番に目録・調査記の概要、展示空間の特徴、展示された文物の特徴を記す。なお、各石碑名の前に附した番号は表1の番号である。

資料① 1906年 関野貞「西安府文廟と碑林における古碑」(関野貞『支那の建築と芸術』岩波書店、1938年出版、197頁-221頁所収)

関野貞は近代日本の建築家・建築史家で、朝鮮半島・中国大陸の建築を調査し、多くの報告書・図譜・論考を著している³。ここで取り上げた資料①は、もとは1908年(明治41年)7月に『時事新報文芸週報』に連載したものであり、関野の1906年(明治39年)10月から11月にかけての清国出張中の西安碑林調査を基にしている⁴。関野はこの調査書のなかで「清国内地では漢魏六朝碑に於いては曲阜文廟、濟寧州文廟を推し、六朝以後の経幢墓誌石等に於いては河南存古閣などあれども、かく多数の碑帖を一区域内に集め得た者は西安府文廟及び碑林の外にはない」と述べている。

さて、この調査書に示されている文物の展示空間は文廟(図1)と碑林(図2)のふたつに分けられる。文廟の空間は、門から泮池・碑閣・東西の建築物、大成殿までの間で、その間に17点の石碑が並ぶ。

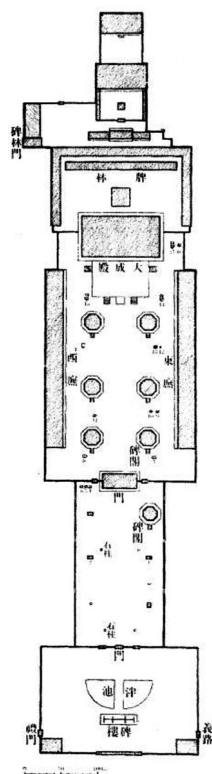


図1 1906年文廟空間平面図

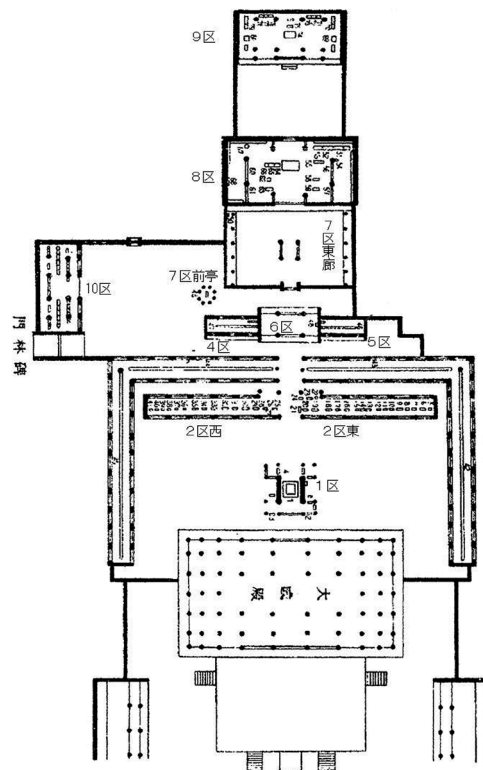


図2 1906年碑林展示空間平面図

(図1・2ともに関野貞「西安府文廟と碑林における古碑」挿図を一部改編)



写真3 3「智永千字文碑」(2009年筆者撮影)



写真4 23「石台孝経」(2007年筆者撮影)

そのうち、唐碑が1点(1「皇甫誕碑」、唐碑の重刻が2点(2「孔子廟堂之碑」、3「智永千字文碑」(写真3))ある。大成殿の奥の空間が碑林である。この時期の碑林の展示空間は8区に分かれている⁵。1区は23「石台孝経」(写真4)を中心とした碑群、2区は東西に細長い建物で39の碑があり、うち唐碑と唐碑重摹碑が15、さらに秦碑宋重刻の29「嶧山刻石」(写真7・8)や47「敦煌太守裴岑紀功碑」(関野のリストには「漢碑再刻」とあり)などがあり、関野は2区を「碑林に於ける尤物の淵藪」と称している。3区は49-60「開成石経」、4区~6区には康熙年間重刻の「孟子」および「修復碑林記碑」(道光22年)が置かれた。7区の前の碑亭には道光年間に移された91「于孝顯之碑」が置かれ、7区東廊には嘉慶から光緒にかけて碑林に収蔵された隋唐時代の墓誌が展示された。8区には元末明初に万年県崇道郷から移設した82「馮宿神道碑」・83「尊勝陀羅尼経」が配された。1・3区は碑林の原型、2区は主に明代以前に碑林に所蔵された碑、7・8区は明清時代に碑林へと移設された碑と分類できる。なお、関野が調査した時期の碑林は文廟の付設建築であり、空間平面図は文廟と碑林に分かれているが、両者は一体化した展示空間と意識されていた。

資料② 1908年 足立喜六「長安の古碑」(以下、足立喜六調査と称す)(足立喜六『長安史蹟の研究』東洋文庫、1933年出版、275頁-292頁所収)

足立喜六は1906年から1910年にかけて西安の陝西高等学堂に数学・物理の日本人教習として滞在していた人物である⁶。彼は西安で桑原鷺蔵や宇野哲人ら東洋学者と出会い、その影響を受け、西安の多くの史跡を巡り、調査し、1933年に『長安史蹟の研究』(東洋文庫)を刊行した。その「第十三章 長安の古碑」に碑林についての調査記録がある。碑林の蔵碑全体がリスト化されているわけではなく、碑林平面図(図3)、碑林門外で販売していた五十五種の蔵石拓本のリスト、碑林所蔵の唐碑についての解説文、図版写真を整理してはじめて展示文物の全体像を伺い知ることができる。表1のうち、平面図によって展示位置が判明するものは区番号を入れた。そのほか、唐碑の解説文にあるものは○、拓本・写真のあるものはそれぞれ示した。なお、足立は度々、碑林を訪れており、平面図や掲載された展示文物がいつの時点のものかは確定できないが、写真の撮影日が1908年(明治41年)4月4日から8月27日のものに限られているので、その間の情報であると思われる。

さて、展示空間の構成は①の図1とほぼ変わらない⁷。展示品の①から②へのもっとも顕著な変化は

6区の「修復碑林記碑」(清代)のあった場所に67「大秦景教流行中国碑」(以下、景教碑と称す。写真5・6)が移設されたことである。景教碑は異端とされたネストリス派キリスト教が唐の長安で流行したことを示す碑で、唐の781年(建中2年)、長安の大秦寺に建てられた。その後、崇聖寺(崇仁寺・金勝寺ともいう)がそこに移転したが、同治年間の回教徒の乱で荒廃し、景教碑はそのまま放置されていた。そのような状況のなか、景教碑に興味をもったデンマーク人のホルムが銀3000両余りで購入し、ロンドンへと持ち運ぼうとした。しかし、陝西高等学堂の王猷が交渉し、精巧なレプリカを作成し、ホルムはそれを欧米に持ち出した。ホルムはその後、米国ニューヨークのメトロポリタン美術館でレプリカの複製を作成し、英国の大英博物館や仏国のギメ東洋美術館などに搬入した。西安で製作された最初のレプリカはヴァチカン美術館にあるという。実物の景教碑は1907年10月4日に碑林へと移送された⁸。移設された当時は写真5のように白い壁の前に設置されており、写真6の現在の設置場所とは異なる。貴重な文物が外国へと持ち出されることを防ぐという「博物館」的な機能を碑林が果たしたはじめてのケースであると言っていることができるだろう。

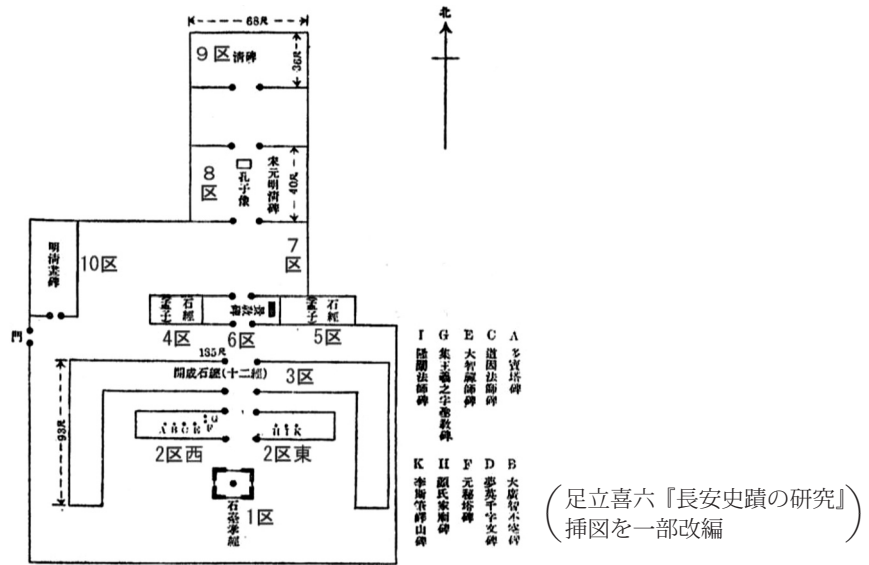


図3 1908年碑林展示空間平面図



写真5 崇聖寺から碑林に移設された67「景教碑」
(足立喜六1908年撮影)



写真6 現在の67「景教碑」(2008年筆者撮影)

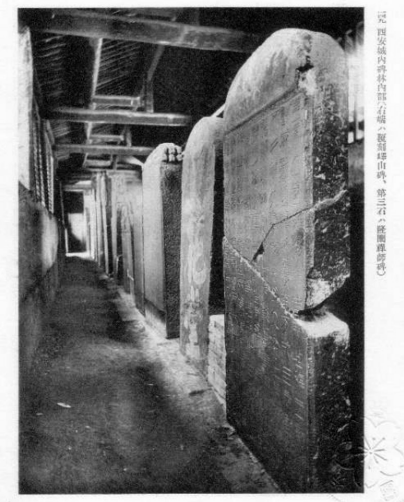


写真7 2区東に展示される29「嶧山刻石」
(足立喜六1908年撮影)



写真8 現在の29「嶧山刻石」
(2007年筆者撮影)

なお、足立の拓本販売リストのなかには資料①の関野のリストではみられなかった43「東陵聖母帖」44「僧懷素法帖」45「肚痛帖」46「斷千字文」など唐代の懷素や張旭の書の後代の重刻碑がみられる。これらは明代から碑林にあるものなので関野も実見しているはずの碑であるが、関野は石碑そのものの古さに価値を見出し、一方は重刻であっても懷素や張旭といった人物の書いた文字に価値を見出す拓本購入者のためのリストであったと言える。

以上、①から②への大きな変化は、海外へと流出しかけた「大秦景教流行中国碑」を文廟の付設機関である碑林が受け入れた点で、碑林の「博物館化」がはじまったとすることができよう。

資料③ 1914年 『図書館所管碑林碑目表』(陝西図書館、1914年。路遠『西安碑林史』西安出版社、1998年出版、270頁-291頁に引用)

この資料は碑林が1912年に文廟の管理から、陝西図書館の管理下に移行したことから作成された目録である。実はこれは最も古い碑林の総合目録である。1913年から1914年まで図書館長であった朱元照の署名があり、また、1914年(民国3年)に碑林が受け入れた石碑も見られることから、このリストは1914年の碑林の蔵石をまとめたものと考えられる。当時の展示室に関する情報はなく、展示場所の記載もないため、表1では所蔵している碑に「○」を付した。

全体として三つの変化がみられる。ひとつは図書館所蔵のものが加えられたことである。9「夏侯純陀造像記」・10「鉗耳神猛造像記」・11「魏国夫人裴氏墓誌」には資料③に「在図書館」とあり、碑林ではなく図書館に置かれていた。このころの陝西図書館は西安市梁府街の陝西省学務公所の東側に所在した。これらは関野・足立の碑林の報告にはない展示文物である。二つ目は、文廟のエリアに立っていた1「皇甫誕碑」・2「孔子廟堂之碑」・3「智永千字文碑」および文廟所蔵の4「郎官題名柱」・5「白道生神道碑」がリストには見られないことである。これは碑林が文廟から切り離され、碑林に所在したものだけが図書館の管理下に入ったことを明確に示すものである。三つ目は、1914年に開元寺より移設された39「杜順和尚行記碑」および85「梵漢合文經幢」(写真9)・86「陀羅尼經幢」・87「于惟則經幢」・88「陀羅尼尊勝經幢」⁹、清末に陝西省扶風で発見された89「多宝塔銘」が新たにリストに加えられたことである。開元寺は西安市の鐘楼東南にあった寺院で、清末には荒廃していた。唐代の文物の保護、海外への流出の防止に碑林が利用されたのであろう。



写真9 85「梵漢合文經幢」(2009年筆者撮影)

資料④ 1935年『西京碑林』(張知道編、陝西省立図書館、1935年3月1日(初版)出版、88頁)

本資料は陝西省立図書館の張知道館長の編による目録¹⁰。巻末に碑石の合計は494種1424方とある。西安ではなく「西京」という名称を表題に使っていることや序文に「建設西北」というスローガンがあることから、1930年代から始まった南京国民政府の「西北建設」や1932年に発足した西京籌備委員会の影響が考えられる¹¹。

目録は、王朝・時代ごとに並べられた時代目録、展示室ごとに記載された地区目録の二つからなる。石碑ごとに番号が付され、時代目録と地区目録それぞれに記載される形式をとっているが、両目録間で多くの番号がずれているため、丁寧に確認する必要がある。図4の展示空間平面図は図の下側が北になっており、資料①②とは異なる方向から描かれている。既存の展示室の位置に変化がなく、西北に11区管理員室が加えられている。

展示品については3つの変化が見られる。まず、ひとつめは、図書館所蔵品が増えたことである。6「正光三年茹氏一百人造像碑」・7「田良寛造像碑」・12「吏部南曹石幢」・13「仏頂尊勝陀尼經幢」など仏教関係の造像碑や石幢が図書館に所蔵された。さらに、唐太宗昭陵の「六駿」のうち4体も図書館のコレクションに加えられた(14「太宗昭陵六駿」)。六駿は昭陵の北司馬道に立てられた六枚の馬のレリーフで、太宗李世民の愛馬であった「白蹄烏」「特勒驃」「颯露紫」「青騅」「什伐赤」「拳毛騧」が刻されている。これらのうち、「白蹄烏」(写真11)「特勒驃」「青騅」「什伐赤」の4体が図書館に収められ、残り2体は米国フィラデルフィアのペンシルヴァニア大学考古学人類学博物館に収蔵された。足立喜六は1909年11月10日、昭陵でのちに米国に流出することとなる「颯露紫」の写真を撮影している¹²(写真10)。陝西図書館は1909年に成立したことから考えて、開設当初には六駿は図書館所蔵ではなかったことになる。その後、2体は1912年もしくは1913年に外国人によって盗み出されたが現地の住民の攻撃にあい失敗し、しばらく西安の旧督署に置かれた。しかし、その後、袁世凱の命により北京へと搬送され、骨董商のC.Tルーが購入し、1918年3月には米国ニューヨークのメトロポリタン美術館の倉庫に保管された¹³。その後、ルーとペンシルヴァニア大学博物館館長のゴードンとの間で交渉がなされ、1921年3月に博物館所蔵となった¹⁴。残りの4体については、ビショップが1917年10月に陝西図書館を訪れた際に実見している¹⁵。図書館平面図は図5のようで、門を入り四明庁(閲覧室)・蔵書楼があり、蔵書楼の左右に石碑仏像、奥に六駿が陳列されていた¹⁶。図書館は1915年に南院門の勸工陳列所内に移転し、1916年に再開、1917年に改修をしている。ビショップは図5の奥の六駿4

体を見たのであろう。2体の盗難を受けて、図書館が文物保護の保管先となったと言える。碑林は石碑を収蔵する施設であり、石刻は碑林ではなく図書館陳列所に所蔵されるというような区分けがなされていたと考えて良いだろう。また、図5の北側の廊房の東には唐の景雲鐘があった。足立は荒廃した迎祥観にあったこの鐘を実見しており、1910年代に図書館へと移設されたことになる。鐘も石碑ではないので碑林ではなく図書館に保管されたのであろう。景雲鐘は解放後に碑林に移送され、現在も碑林博物館の屋外に展示されている。

ほかの碑林の展示・収蔵品については、新たに79「攀龍附鳳」が見られ、これは民国初年に科挙試験場である貢院から移管されたものである。宇野哲人は1907年に貢院を訪れてこれを実見したと書いている¹⁷。また、91「唐吳道子写意菩薩像」・89「魯司寇孔子像」などの画碑や68「寿字碑」・90「九成宮醴泉銘」・80「少林寺戒壇銘」の唐碑を後代に重刻した石碑も新たにリストに載せられた。なお、94「李彬夫人宇文氏墓誌」はこの目録以降、姿を消すが、資料④では清末に何者かに持ち去られ端方に売られたとの記載があり、ほかの資料では、光緒28年端方が持ち出し、目録にあるが石はないという記載も見られ、事実はわからない。

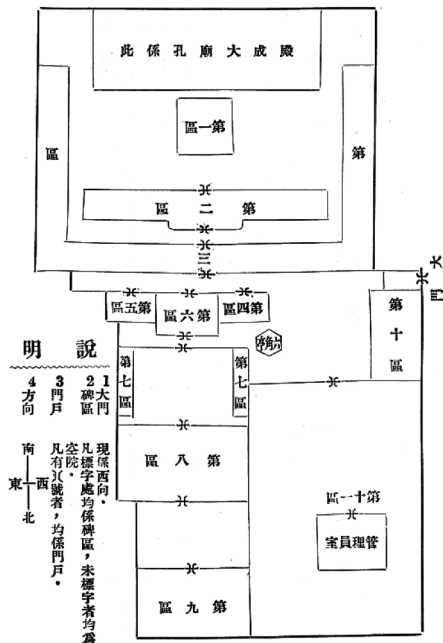


図4 1935年碑林展示空間平面図
 (『西京碑林』より)

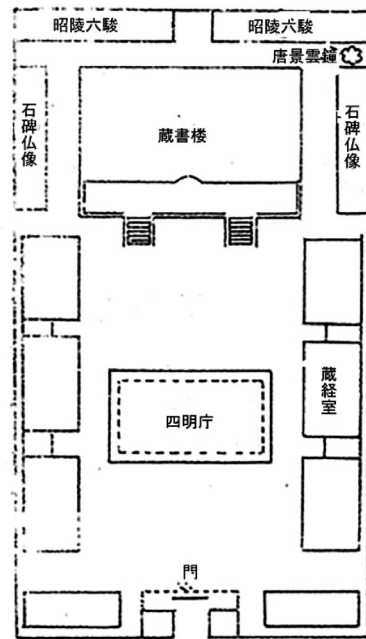


図5 陝西図書館平面図
 (『陝西省図書館館史』挿図を改編)

8

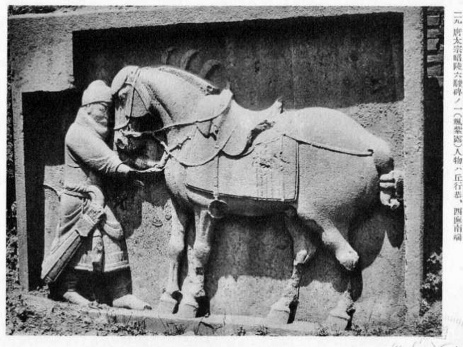


写真10 六駿「颯露紫」(1909年11月足立撮影)
 (現在は米国ペンシルヴァニア大学博物館所蔵)

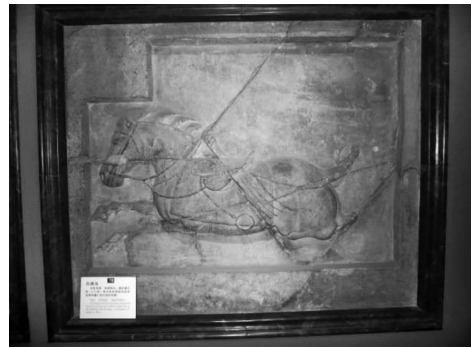


写真11 六駿「白蹄烏」(2008年著者撮影)
 (現在は西安碑林博物館石刻芸術陳列館展示)

以上、六駿の盗難・流出事件は図書館が文物を収蔵し保護するという機能を有する契機となった。一方、碑林は展示空間、所蔵品ともに変化はほとんどないが、南京国民政府の西北建設の影響を受けはじめていた。この間、碑林の展示空間の老朽化はかなりすすんでおり、張知道も序文で「いまの各建築物は長い間、修築されておらず、こわれたままになっている。いつ新たなものに換えることができるのか、わからない」と述べているように、次の課題となっていた。

資料⑤ 1938年『西安碑林碑石目録』（西安碑林管理委員会編、1938年12月作成。路遠『西安碑林史』西安出版社、1998年出版、350頁-421頁に引用）

本目録は西安碑林博物館図書館所蔵の手稿である。2種あり、一つは第一室から第七室までのリスト、もうひとつは新たに設けられた第八室のリストである。1935年春に開設された中央古物保管委員会在西安弁事処（主任は考古学者の黄文弼）と西京籌備委員会（委員長は張継）を中心に、「整理西安碑林工程監修委員会」が組織され¹⁸、南京国民政府の予算によって、碑林の大規模な改修がおこなわれることとなった。1937年4月より工事が始まったが、7月に日中戦争が勃発したため、南京からの予算はストップした。その後、陝西省が資金を負担することで工事は継続し、1938年3月に完成した。この改修を契機に、1938年5月1日に「陝西省西安碑林管理委員会」が創設され、碑林の管理は陝西省図書館からこの委員会に移されることになる。委員会では専門的な碑林の設計・管理、碑石の採拓、遊覧・鑑賞、会計にかかわる事項をおこなった。主任委員は陝西省考古会委員長・張鵬一¹⁹、ほかの委員は民政庁・教育庁・高等法院から6名が集められた。専門的な観点から碑林の収蔵・展示について議論された。この西安碑林管理委員会が作成したものが『西安碑林碑石目録』である。

図6は碑林に残されている档案資料をもとに描かれた1938年の碑林展示空間平面図である。1937年から1938年にかけての改修によって、23「石台孝経」周囲の旧1区はそのまま第1室となり、旧1区と旧3区の間の東西に長い旧2区が撤去され、旧2区と旧3区を合わせて開成石経を展示する第2室が造られた。その北の旧4・5・6区を第3室、旧8区を4室、旧9区を5室に改修、その西側の旧11区・管理人室のあった場所には6・7室、さらに東には新たに8室が建設された。この改修で大き

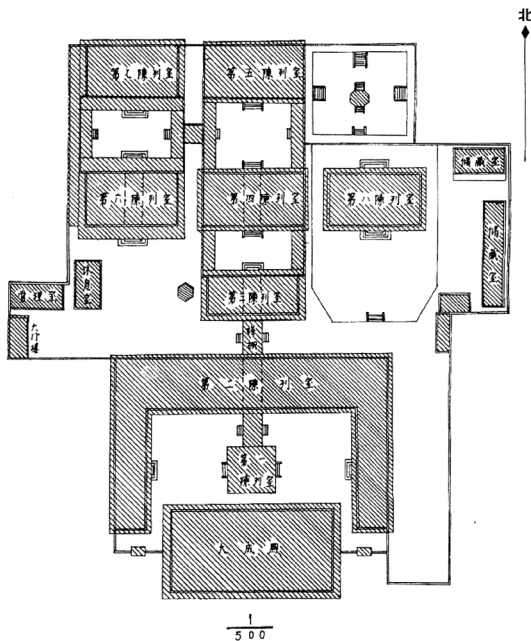


図6 1938年碑林展示空間平面図
(路遠『西安碑林史』より転写)



写真12 96「慧日寺石壁真言」
(2007年筆者撮影)

く変化した点は3つ。第一の変化は、第2室を拡張・整備することにより碑林のはじまりとも言える「開成石経」を前面に出したことである。第二の変化は唐碑をメインに据えた第3室を充実させたこと。旧2区に撤去により、そこで展示されていた24~28、31~39の唐碑、40~42の唐碑の重刻を3室に移動させた。さらに、旧7区東廊の69~78の唐碑・隋唐墓誌、旧8区の唐の墓誌・石碑、旧9区の91の唐碑も3室に移設された。また、改修の過程で碑林のなかから再発見された95「不空和尚訳経碑」・96「慧日寺石壁真言」(写真12)・97「仏経残石」の唐碑も3室に設置された。このように改修を通じて3室に貴重な隋唐の石碑・墓誌を集中させることができた。なお、旧2区の43~46の唐碑重刻は4室、29・47の秦漢碑の重刻は7室へと移設された。5室には80・89・92の唐碑重刻、83~88の唐代の造像碑・経幢が展示された。

三つ目の大きな変化は、第8室が新設されたことである。この8室は陝西省出身の政治家・書家で、当時、国民政府監察院院長であった于右任が所蔵していた111「鴛鴦七志齋」を展示するためのスペースとして建設された²⁰。資料⑤の第8室のリストは、空間を三つにわけ、東側に162種、西側183種、中間に39種、さらに北魏造像が1点、合計385点の西晋~唐の墓誌が記載されている。「鴛鴦七志齋」は1920年代に洛陽の邙山附近で発掘されたものがほとんどである。また、112「熹平石経残碑」も于右任の所有であったが「鴛鴦七志齋」の8室とは別に保管され、日中戦争中には于右任の出身地の陝西省三原県に運ばれるが、不明になった。その後再発見され、1952年に碑林へと移設された。

資料⑥ 1946年『西京碑林蔵石目録(民国35年12月)』(陝西省歴史博物館編集・発行、1947年出版、50頁)

この目録は1944年4月に開館した陝西省歴史博物館が1947年2月に編集・刊行した目録である。1946年12月時点での文物が第1室から第7室までの展示室と大門内照壁・前院・弁公室に分類され、記載されている。1912年に碑林が図書館管理下に置かれて以降、碑林蔵石と区別されていた文廟の石碑および建築物等は1944年に陝西省歴史博物館への財産移譲という手続きがとられており²¹、すでにそれらは博物館蔵となっていたが、本資料は「碑林蔵石」と限定していることから、文廟のエリアにあ

10

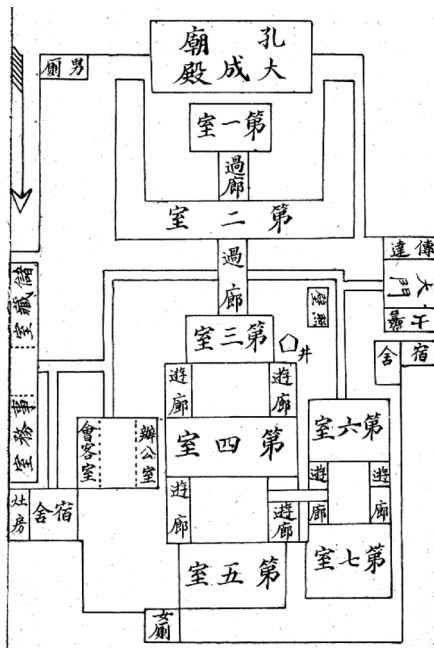


図7 1946年碑林展示空間平面図
(『西京碑林蔵石目録』より転写)

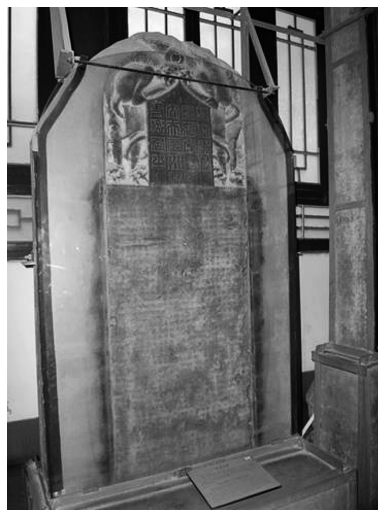


写真13 98「孟頫達碑」
(2009年著者撮影)



写真14 100「興慶宮残図」
(2007年著者撮影)

った「皇甫誕碑」や4「郎官石幢」はリストには含まれていない。

資料⑤に付された1946年の展示空間平面図(図7)を見ると、1938年に造られた8室が展示室ではなくっており、弁公室・会客室に変わっている。ほかは図6の1938年の平面図と大きな変更はない。

展示内容については1室から3室、5室・7室の展示品の変更はない。大きな変更点は2点。第一点は、8室で展示されていた鴛鴦七志齋の385点の墓誌等は、日中戦争に対処するため、1940年に碑林東院の地下に埋められた。その後、掘り出されたのは1947年8月から9月の間である²²。この目録は1946年の時点のものであるから、鴛鴦七志齋蔵石はまだ地中に埋まっているので、このリストには入っていない。そのため、8室は陳列室には使用されておらず、弁公室・会客室がそこに配置されていた。

第二点は発掘調査によって出土した文物が展示・所蔵品に加えられたことである。4室西廊・4室外西・5室西廊・前院には98「孟顛達碑」(1910年出土、写真13)、99「三蔵聖教序」(民国初出土)、100「興慶宮殘図」(1934年出土、写真14)、101「韋瑱墓誌」(1943年出土)・102「韋瑱石槨」(1941年出土)、103「慧堅禪師碑」(1945年出土)、104白石造像(1943~1944出土)、106「殘石經幢」(1941~1942出土)が新たに収蔵された。これらのうち、101・102・104・106は王子雲率いる西北芸術文物考察団²³と夏子欣を中心とした西京籌備委員会との共同調査によって発掘された文物と考えられる。また、102「韋瑱石槨」は西安城内の大湘子廟街旧教育局内の階段の石材として使用されていた唐刻の石廓で、1941年に発見され、碑林に保存された²⁴。また、101「韋瑱墓誌」は102をきっかけに王子雲が発掘し、碑林に保存されたことが知られている²⁵。106「殘石經幢」は1941年から1942年にかけて西京東廓門外滄橋郷第七保にて調査した際に発見したもので碑林に保存された²⁶。また、六朝時代のものと考えられる104「白石造像」は1943年から1944年の間に西安城内の驪馬市で発見されたものと考えられる²⁷。このように石碑のみならず新発見の文物を収蔵する「博物館」として碑林は位置づけられるようになったのである。

資料⑦ 2006年『西安碑林博物館碑刻総目提要』(陳忠凱等編、線装書局、2006年出版)

西安は1949年5月に解放され、7月には西安市軍管会が陝西省歴史博物館を接收し、近代西安碑林の歴史は終わる。資料⑦は2006年現在、西安碑林が所蔵する碑石目録である。1949年までに碑林に所蔵された碑が現在どの展示室に展示されているのかについて表1の⑦に示した。資料⑦には展示室についての記載はないため、路遠『西安碑林史』および西川寧『西安碑林』(講談社、1966年)、塚田康信『西安碑林の研究』(同刊行会、1983年)などの記載をもとにわかる範囲で示した。なお、これらの資料から著者が展示室を確認出来ていない場合は「○」を付した。

現在の展示空間は、資料⑦の旧1室を「石台孝経」碑亭と称し、開成石経を展示する旧2室を1室と呼び、以降旧3~7室はそれぞれ2~6室と番号がひとつずつずれることになった。なお、1963年には1室の西側に石刻芸術陳列室が造られ、1982年には6室の南に清順治3年重刻「淳化閣帖」を展示する7室、2010年には1室の東側(旧8室が建っていた場所)に仏像を主に展示する石刻芸術館が開館した(図8参照)。

資料⑥1946年に展示されていた石碑のなかで展示室が移動したものは以下の通り。29「嶧山刻石」・47「敦煌太守裴岑紀功碑」(写真15)・68「寿字碑」・90「九成宮醴泉銘」の唐碑の後代重刻は旧7室から5室に移動した。5室は重刻を集めた展示室で、80「少林寺戒壇銘」も旧5室から移された。また、旧7室、すなわち6室は元・明・清の文人の詩の書が主体となった。旧5室にあった85「梵漢合文經幢」は貴重な唐碑が展示される2室に移設され、91「于孝顯之碑」は3室に移動した。後述するように3室は新たに博物館に移設された石碑を集めた展示室で、91は清・道光4年に富平より移設したという

理由で3室に移されたのであろう。3室にはこのほか文廟から移管された1「皇甫誕碑」・2「孔子廟堂之碑」・3「智永千字文碑」が展示された。旧5室に展示されていた84「田僧敬造像記」(写真16)は1963年には石刻芸術陳列館に移設されたが、陳列館が完成するまで、碑林のどこに展示されていたのかは、今後、調査したい。陝西図書館で陳列されていた6「正光三年茹氏一百人造像碑」・7「田良寛造像碑」・8「四面造仏像記」・14「昭陵六駿」も1963年には石刻芸術陳列館に展示された。11「魏国夫人裴氏墓誌」は6室外に「鴛鴦七志齋」とともに展示された。

資料⑥1946年から1949年の西安解放までに碑林に新たに展示されるようになった石碑は二つある。ひとつは、1940年に地中に埋められ1947年に掘り出された111「鴛鴦七志齋」の385点の墓誌・石碑である。これらは2室・3室の間、3室・4室の間、5・6室の間の碑廊の壁に展示された(写真17)。もうひとつは、113「武都太守等題名殘碑」(写真18)・114「美原神泉詩序碑」・115「述聖頌碑」・116「告華岳文」・117「顔勤礼碑」の5点で、ともに新城小碑林から移設されたものである。西安新城小碑林とは、1928年に陝西省政府主席の宋哲元が建てた施設で、陝西省政府があった新城院内にあり、陝西省各地の碑石を蒐集していた。これらは新たに博物館に移設された石碑を展示する第3室に収められた。この3室は以後、考古発掘によって得られた石碑も次々に加えられることになる。「博物館化」の重要な展示空間と言ってもよいだろう。

解放後の碑林の歴史は、1950年に西北歴史陳列館、1952年に西北歴史博物館、1955年に陝西省博物館となり、陝西省出土の青銅器や壁画など石碑・石刻以外の文物も収蔵するようになる²⁸。「博物館」としての機能の拡張とともに、上述した石刻芸術陳列館、石刻芸術館が増設された。この間、1959年に文廟エリアと碑林エリアを区分するように建っていた大成殿が雷によって焼失した(写真19)。大成殿の跡地は広場となり、結果として文廟・碑林エリアは一体化し、全体が博物館展示施設となった。1992年に陝西歴史博物館が開館するにあたり、出土文物の多くは歴史博物館に移管され、碑林は石碑・石刻・仏像を中心とした西安碑林博物館となった(写真20)。

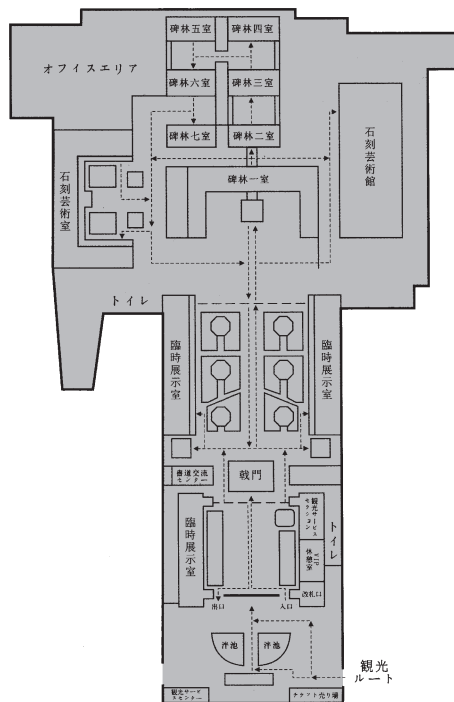


図8



写真15 47「敦煌太守裴岑紀功碑」(2007年筆者撮影)



写真16 84「田僧敬造像記」(2007年著者撮影)

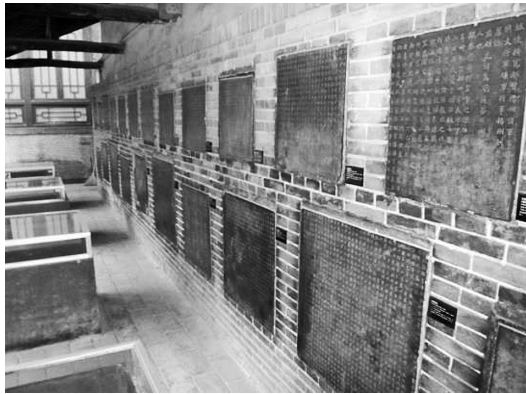


写真17 111「鴛鴦七志齋」旧蔵墓誌(2009年筆者撮影)



写真18 113「武都太守等題名残碑」
(2007年著者撮影)

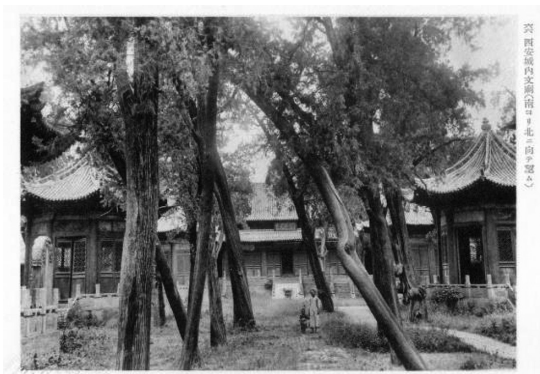


写真19 文廟大成殿
(足立喜六『長安史蹟の研究』撮影日時不明)



写真20 碑林「石台孝經」碑亭前
(2018年著者撮影、淑徳大学海外ゼミ合宿にて)

3. 西安碑林の博物館化と文物保護～おわりに

以上、①～⑦の時期の展示空間と展示文物の変遷についてまとめた。以下、近代西安碑林の歴史をⅠ期からⅣ期にわけて分析し、本稿のまとめとしたい。

Ⅰ期 ～1912年 文廟時期（資料①②）

文廟の附設施設であった碑林は宋代に石台孝経や開成石経を基礎として創設されたが、清末に至るまでに多くの西安周辺の唐碑・墓誌が移設された。さらに、清末における文物の海外流出は深刻な状況であり、その象徴が大秦景教流行中国碑の盗難未遂事件であった。景教碑を受け入れたことは碑林の「博物館化」の第一歩であったと言える。

Ⅱ期 1912年～1938年 図書館時期（資料③④）

辛亥革命後、1912年に碑林は陝西図書館の管理下に置かれた。碑林とともに図書館にも陳列室が設けられ、石刻や仏像等とともに唐昭陵六駿4体が収蔵された。2体が海外へと流出してしまった六駿を図書館が保管したことは、石碑のみならず石刻も含めた碑林の「博物館化」への契機となったと言える。

Ⅲ期 1938年～1944年 碑林管理委員会時期（資料⑤）

大改修終了後、1938年より図書館にかわって碑林管理委員会が碑林を管理することとなった。改修後、唐碑は3室にまとめられるなど整理がすすむとともに、于右任所蔵の「鴛鴦七志齋」の墓誌を受け入れ、唐以前の収蔵品は大幅に増加した。1941年には西北芸術文物考察団と西安碑林管理委員会の共同発掘がおこなわれ、新たな文物が碑林に収められた。考古発掘品を収蔵する「博物館」の機能が徐々に碑林にそなわってきた時期と言える。

Ⅳ期 1944年～1949年 陝西省歴史博物館時期（資料⑥⑦）

1944年陝西省歴史博物館が開館する。大秦景教流行中国碑や六駿に象徴されるような文物の海外流出の防止、新たな考古発掘品の収蔵・展示、荒廃した寺廟の文物の保管などこれまでの碑林の経験が博物館開設へとつながったと言える。

以上で本稿の整理・考察を終えたい。解放後の碑林における石碑の収蔵過程については、中国現代史と考古学とのかかわりで別途論じる必要がある。

年表 近代西安碑林関係年表

	碑林関連年表	文物関連年表	政治関連
1905年			科举制廃止
1906年10月-11月	関野貞、碑林を調査（資料①）		
1907年10月		ホルムによる大秦景教流行中国碑盗難未遂事件発生	
1908年	足立喜六、碑林調査（資料②）。		
1909年	陝西図書館開設	足立喜六、唐昭陵六駿「颯露紫」の写真を撮影	
1911年			辛亥革命
1912年1月-2月			中華民国臨時政府成立、清朝滅亡
	碑林、陝西図書館の所管となる		
1913年5月		昭陵から六駿2体が盗み出される。	
1915年	陝西図書館が勸工陳列所内に移動		
1914年	『図書館所管碑林碑目録』（資料③）完成		

	碑林関連年表	文物関連年表	政治関連
1917年10月		このころまでに六駿4体が図書館に展示される。	
1918年3月		六駿2体がニューヨーク・メトロポリタン美術館に保管	
1921年3月		ペンシルヴァニア大学が六駿2体の購入を完了	
1927年4月	陝西図書館が陝西省中山図書館に改称		
1928年3月	古物保管委員会(南京)成立		
6月			南京国民政府による北伐完了
1930年6月	古物保存法施行		
1931年7月	陝西省中山図書館が陝西省立第一図書館に改称		
1932年5月	西京籌備委員会発足		
1933年		足立喜六『長安史蹟の研究』(1933年)刊行	
1934年7月	中央古物保管委員会発足		
1935年3月	『西京碑林』(資料④)出版。		
春	中央古物保管委員会在西安弁事処開設		
1936年10月	整理西安碑林監修委員会発足		
1937年4月	陝西省立西京図書館に改称。 西安碑林の大規模改修工事が始まる(～1938年4月)		
7月			日中戦争開始
10月	中央古物委員会在西安弁事処廃止。碑林改修は陝西省政府へ移管		
1938年3-4月	碑林改築完了。	鴛鴦七志斎蔵石を碑林へ移管	
5月	陝西省西安碑林管理委員会発足		
12月	『西安碑林碑石目録』(資料⑤)完成		
1940年6月		鴛鴦七志斎蔵石を地中へ埋蔵	
	西北芸術文物考察団(重慶)設立		
1944年4月	陝西省歴史博物館開設		
1945年6月	西京籌備委員会廃止		
8月			日中戦争終戦
	西北芸術文物考察団解散		
1947年2月	『西京碑林蔵石目録』(資料⑥)出版		
11月-12月		鴛鴦七志斎蔵石を地中から掘り出し	
1948年6-7月		新城小碑林から38点の石碑を移設	
1949年5月	西安解放、7月に西安市軍管会が陝西省歴史博物館を接収		
10月			中華人民共和国成立
1950年5月	西北歴史陳列館となる		
1952年11月	西北歴史博物館となる		
1955年6月	陝西省博物館となる		

表1

番号	時代	年代	西暦	碑名	①1906年	②1908年	③1914年	④1935年	⑤1938年	⑥1946年	⑦2006年	備考
1	唐	貞觀		皇甫誕碑(隋皇甫君碑)	文廟	拓本					3室	明代西安長安鳴犢鎮皇甫川より文廟に移設。1944年文廟から陝西省歴史博物館移管。歐陽詢書。
2	唐	武德9年	626	孔子廟堂之碑(孔子家廟)	文廟	拓本					3室	宋建隆・乾徳年間王彦超重刻、文廟に立碑。1944年文廟から陝西省歴史博物館移管。虞世南書。
3	隋			智永千字文碑(智永真草千字文)	文廟	拓本					3室	明初、西安迎祥觀より文廟に移設。1944年文廟から陝西省歴史博物館移管。智永禪師書。宋大觀3年重刻。
4	唐	大中12年	858	郎官題名柱(唐尚書省郎官石柱)(郎官石幢)		拓本					○	明代に移設。1944年文廟から陝西省歴史博物館に移管。張旭書。
5	唐	永泰元年	765	白道生神道碑(太子賓客白道生碑)(白公神道碑)		○					○	清道光2年文廟に立碑、その後、文廟管理。原碑は咸寧鳳凰栖原に立碑。
6	北魏	正光3年	522	北魏正光三年茹氏一百人造像碑(大代正光造像記)(茹昌等一百人造像記)				図書館			石刻	
7	北魏	正始 ~延昌	504 -515	田良寛造像碑(道民田良寛等四十五人造像記)				図書館			石刻	
8	北周	武成2年	560	四面造仏像記(碑)				図書館			石刻	
9	北周	天和4年	569	夏侯純陀造像記			図書館	図書館			○	
10	隋	開皇4年	584	鉗耳神猛造像記			図書館	図書館			○	
11	唐	景龍3年	709	魏国夫人裴氏墓誌(大唐故魏国太夫人裴氏墓誌)			図書館	図書館			6室外	
12	唐	天宝元年	742	吏部南曹石幢(吏部南曹造仏頂尊勝陀羅尼經幢)				図書館			○	
13	唐			仏頂尊勝陀尼經幢				図書館			○	
14	唐			太宗昭陵六駿				図書館			石刻	四点
15	唐			石碑造像殘記				図書館				
16	唐			千仏像殘石				図書館				
17	唐	景龍		舍利塔				図書館				
18	唐			造像葬僧石槨				図書館				
19	唐			唐代葬僧石槨				図書館				

番号	時代	年代	西暦	碑名	①1906年	②1908年	③1914年	④1935年	⑤1938年	⑥1946年	⑦2006年	備考
20	唐			白石千仏石				図書館				
21	唐			黄玉千仏石				図書館				
22	隋			鎬馬仁造像碑(騎馬仁者君造像記)				図書館?			○	④に誤字あり。図書館所蔵か。
23	唐	天宝4年	745	石台孝経(唐玄宗御註孝経碑)	1区	1区 /写真	○	1区	1室	1室	碑亭	宋元祐年間に唐長安国子監から移設。
24	唐	天宝2年	743	隆闡法師碑	2区東	2区東 /写真	○	2区東	3室	3室	2室	宋初、長安芙蓉寺旧址より移設。僧懷輝(隆闡法師)書。
25	唐	建中元年	780	顔氏家廟碑(顔維貞家廟碑)	2区東	2区東	○	2区東	3室	3室	2室	宋泰平興国年間移設。顔真卿書。
26	唐	長慶2年	822	梁守謙功德銘(邪国公功德銘) (邪国公梁守謙功德碑)	2区東	拓本 /写真	○	2区東	3室	3室	2室	宋初長安大寧坊興唐寺より移設。楊承和書。
27	唐	開元11年	723	御史台精舍碑	2区東	拓本	○	2区東	3室	3室	2室	元末～明代前期移設。梁昇卿書。
28	唐	景龍3年	709	法苑禪師碑(比丘尼法苑法師碑) (大唐□□寺比丘尼法苑法師碑)	2区東	拓本	○	2区東	3室	3室	2室	清乾隆24年以前西安長安神禾原より移設。劉欽旦書。
29	秦	始皇28年	前219	嶧山刻石	2区東	2区東 /写真	○	2区東	7室	7室	5室	宋淳化4年文廟立碑。李斯書。宋・徐鉉重刻。
30	唐			千字文(懷素草書千字文)		拓本	○	2区東	4室	4室	3室	明成化6年余子俊重刻文廟立碑。僧懷素書。
31	唐	龍朔3年	663	道因法師碑(多宝寺道因法師碑)	2区西	2区西 /写真	○	2区西	3室	3室	2室	宋初、長安懷德坊慧日寺旧址より移設。歐陽通書。
32	唐	咸亨3年	672	集王聖教序碑(集羲之聖教序) (大唐三藏經聖教序附心經)(集王右軍書三藏聖教序)	2区西	2区西	○	2区西	3室	3室	2室	宋初、長安修德坊弘福寺旧址より移設。僧懷仁集王羲之書。
33	唐	開元24年	736	大智禪師碑	2区西	2区西 /写真	○	2区西	3室	3室	2室	宋代移設。史維則書。
34	唐	天宝11年	752	千仏寺多宝仏塔感志碑	2区西	2区西	○	2区西	3室	3室	2室	宋初、長安安定坊千福寺旧址より移設。顔真卿書。
		貞元21年	805	楚金禪師碑								呉通微書
35	唐	建中2年	781	広智三藏和尚碑(不空和尚碑) (三藏不空法師碑)	2区西	2区西	○	2区西	3室	3室	2室	宋初、長安城南興善寺より移設。徐浩書。
36	唐	会昌元年	841	大達法師玄秘塔碑	2区西	2区西 /写真	○	2区西	3室	3室	2室	宋初長安興寧坊安国寺旧址より移設。柳公權書。
		大中5年	851	勅内莊宅使牒								
		大中6年	852	比丘尼正言疏								

番号	時代	年代	西暦	碑名	①1906年	②1908年	③1914年	④1935年	⑤1938年	⑥1946年	⑦2006年	備考
37	唐	開元9年	721	鎮軍大將軍吳文殘碑(興福寺半截碑)(興福寺殘碑)	2区西	○	○	2区西	3室	3室	2室	明万曆年間西安南城濠より発見、移設。僧大雅集王羲之書。
38	唐			心経(百塔寺心経)(百塔寺石刻草書心経)(草心経)		拓本	○	2区西	3室	3室	2室	明成化10年孫仁、百塔寺より移設。鄭萬鈞集王羲之書。
39	唐	大中6年	852	杜順和尚行記碑(華嚴寺杜順和尚行記)	—	—	○	2区西	3室	3室	2室	民国3年開福寺より移設。董景仁書。
40	唐	広徳2年	764	争坐位稿(争座位文稿)(与郭僕射書)	2区西	拓本	○	2区西	3室	3室	2室	宋熙寧年間重刻。文廟立碑。顏真卿書。
41	唐	大曆2年	767	李氏三墳記碑(李陽氷篆書)	2区西	○	○	2区西	3室	3室	2室	宋大中祥符3年重刻文廟立碑。李陽氷書。
42	唐	大曆2年	767	李氏栖先塋記碑(李陽氷書篆先塋記)	2区西	拓本	○	2区西	3室	3室	2室	宋大中祥符3年重刻文廟立碑。李陽氷書。
43	唐	貞元9年	793	東陵聖母帖(懷素聖母帖)		拓本	○	2区西	4室	4室	3室	明代移設。僧懷素書。宋元佑3年宋人重刻。
44	唐	貞元		僧懷素法帖(唐僧張懷素法帖)(藏真律公二帖)		拓本	○	2区西	4室	4室	3室	明代移設。僧懷素書。宋元祐8年游師雄重刻。
45	唐			肚痛帖		拓本	○	2区西	4室	4室	3室	明代移設か。張旭書。宋嘉祐3年李丕緒上石。
46	唐	永和12年	137	断千字文(千字文断碑)(断狂草千字文)		拓本	○	2区西	4室	4室	3室	明代移設。張旭書。北宋元豊3年呂大防重刻。
47	漢	漢安元年	142	敦煌太守裴岑紀功碑	2区西	写真	○	2区西	7室	7室	5室	清乾隆51年申兆定重刻。原碑は新疆巴里坤にあり。
				会仙友								同上。原碑は四川逍遙山にあり。
				漢石経殘字								同上。尚書・論語。
				漢兗州刺史洛陽令殘字碑								同上。
48	北魏			造像殘石(陽刻石佛像)	8区			2区西	5室	5室		同一文物を示しているのかは不明。
49	唐	開成2年	837	春秋左氏伝(唐石経)	3区	3区	○	3区	2室	2室	1室	北宋元祐2年年間国子監より移設。
50	唐	開成2年	837	公羊伝(唐石経)	3区	3区	○	3区	2室	2室	1室	
51	唐	開成2年	837	穀梁伝(唐石経)	3区	3区	○	3区	2室	2室	1室	
52	唐	開成2年	837	孝経(唐石経)	3区	3区	○	3区	2室	2室	1室	
53	唐	開成2年	837	論語(唐石経)	3区	3区	○	3区	2室	2室	1室	
54	唐	開成2年	837	爾雅(唐石経)	3区	3区	○	3区	2室	2室	1室	
55	唐	開成2年	837	儀礼(唐石経)	3区	3区	○	3区	2室	2室	1室	
56	唐	開成2年	837	礼記(唐石経)	3区	3区	○	3区	2室	2室	1室	

番号	時代	年代	西暦	碑名	①1906年	②1908年	③1914年	④1935年	⑤1938年	⑥1946年	⑦2006年	備考
57	唐	開成2年	837	周易(唐石經)	3区	3区 /写真	○	3区	2室	2室	1室	
58	唐	開成2年	837	尚書(唐石經)	3区	3区	○	3区	2室	2室	1室	
59	唐	開成2年	837	毛詩(唐石經)	3区	3区	○	3区	2室	2室	1室	
60	唐	開成2年	837	周礼(唐石經)	3区	3区	○	3区	2室	2室	1室	
61	唐	開成2年	837	五經文字			○	3区	2室	2室	1室	
62	唐	開成2年	837	九經字樣			○	3区	2室	2室	1室	
63	唐	開成2年	837	石經題名(写經官題名)				3区	2室	2室	1室	
64	唐	開成2年	837	進石經狀残字			○	3区				
65	唐	咸通4年	863	程府君墓誌蓋				3区	3室	3室	2室	清光緒25年以前收藏。程再思書。76「程修己墓誌」の蓋。
66	唐	開元		王維竹子図				4区	5室	5室	4室	鳳翔県より移設。王箴書。郭皓重刻。宋元祐6年游師雄題。
67	唐	建中2年	781	大秦景教流行中国碑	-	6区 /写真	○	6区	3室	3室	2室	呂秀巖書。明天啓3年出土、光緒32年移設。
68	唐			寿字碑				6区	7室	7室	5室	道光24年石栢重刻立碑。呂道人書。薩迎阿藏。
69	唐	開元4年	716	法藏禪師塔銘(淨域寺法藏禪師塔銘)	7区東廊	○	○	7区東廊	3室	3室	2室	清嘉慶年間以降、百塔寺より移設。
70	唐	天宝12年	753	令狐氏墓誌(雁門郡夫人令狐氏墓誌)(張元忠妻令狐氏墓誌)	7区東廊	○	○	7区東廊	3室	3室	2室	清光緒25年以前收藏。
71	唐	元和10年	815	魏遼墓誌	7区東廊	○	○	7区東廊	3室	3室	2室	清光緒25年以前收藏。
72	唐	元和15年	820	韋瑞墓誌(韋瑞玄堂誌)(京兆韋玄堂誌)	7区東廊	○	○	7区東廊	3室	3室	○	清光緒25年以前收藏。韋紆書。
73	唐	会昌5年	845	魏邈妻趙氏墓誌	7区東廊	○	○	7区東廊	3室	3室	2室	清光緒25年以前收藏。魏匡贊書。
74	隋	大業12年	616	宋永貴墓誌	7区東廊		○	7区東廊	3室	3室	2室	清光緒25年以前收藏。
75	唐	萬歲通天2年	697	梁師亮墓誌	7区東廊		○	7区東廊	3室	3室	2室	清光緒25年以前收藏。
76	唐	咸通4年	863	程修己墓誌	7区東廊		○	7区東廊	3室	3室	2室	清光緒25年以前收藏。程進思書。
77	唐	景龍3年	709	許公及夫人楊殘氏合葬墓誌石(許公及妻楊氏墓誌)(楊氏墓誌残石)			○	7区東廊	3室	3室	○	清光緒25年以前收藏。李為仁書。
78	唐	開元29年	741	多宝塔銘			○	7区東廊	3室	3室	2室	清末陝西扶風発見。郭楚貞ら造。

番号	時代	年代	西暦	碑名	①1906年	②1908年	③1914年	④1935年	⑤1938年	⑥1946年	⑦2006年	備考
79	唐			攀龍附鳳	—	—		7区東廊	4室東廊	4室東廊		民国初年貢院より移設。虞世南書。明嘉靖重刻。宇野哲人は貢院で実見。
80	唐	開元2年	714	少林寺戒壇銘				7区東廊	5室	5室	5室	義浄述李邑書。光緒元年郭建本重刻立碑か。
81	唐	咸亨4年	673	韓宝才墓誌	7区東廊	○	○	8区	3室	3室	2室	清光緒25年以前収蔵。
82	唐	開成2年	837	馮信神道碑(馮信碑)(馮公神道)	8区	拓本	○	8区	3室	3室	2室	元末明初、万年県崇道郷馮信墓前より文廟へ移設。柳公權書。
83	唐	大中6年	852	尊勝陀羅尼經(万年県崇道郷乾村造仏頂尊勝陀羅尼經幢)	8区		○	8区	5室	5室	○	王倫建
84	北魏			北魏田僧敬四面造像碑(田僧敬造像記)		写真	○	8区	5室	5室	石刻	
85	唐			梵漢合文經幢	—	—	○	8区	5室	5室	2室	民国3年開元寺より移設。
86	唐	垂拱3年	687	陀羅尼經幢(大經幢)	—	—	○	8区	5室	5室	○	民国3年開元寺より移設。
87	唐	大中2年	848	陀羅尼經幢(于惟則經幢)	—	—	○	8区	5室	5室	○	民国3年開元寺より移設。王鉉記尚書于惟則建。
88	唐			陀羅尼尊勝經幢	—	—	○	8区	5室	5室	?	民国3年開元寺より移設。開元寺經幢か?
89	唐	開元		魯司寇孔子像(孔聖立像)		○		8区	5室	5室	4室	吳道子画。宋代重刻。明嘉靖年題。
90	唐	貞觀6年	632	九成宮醴泉銘				8区	7室	7室	5室	歐陽詢書。乾隆6年清王端重刻。
91	唐	貞觀14年	640	于孝顯之碑(于君之碑)	7区前亭	写真	○	9区	3室	3室	3室	清道光4年富平より移設。
92	唐	開元		唐吳道子写意菩薩像(觀世音菩薩像)		写真		9区	5室	5室	4室	吳道子画。清康熙年間張世錫重刻。
93	唐	大中		殘經幢				11区		5室		
94	唐	咸通8年	867	李彬夫人宇文氏墓誌	—	—	△	11区	—	—	—	清光緒25年以前収蔵。楚封書。
95	唐			不空和尚說經碑	—	—	—	—	3室	3室	2室	1938年碑林で再発見。
96	唐			慧日寺石壁真言	—	—	—	—	3室	3室	2室	1938年碑林で再発見。趙從師書。
97	唐			仏經殘石	—	—	—	—	3室	3室		1938年碑林で再発見。
98	隋	開皇20年	600	孟顛達碑	—	—	—	—	4室西廊	4室西廊	3室	清宣統2年西安長安南里王村出土。①に1948年移設とあるが、②1946年目錄にあり。
99	唐	咸亨		三藏聖教序	—	—	—	—	4室西廊	4室西廊	6室外	民国初年西安梅檀林出土。僧懷仁集王羲之書。明刻。
100	唐			興慶宮殘図	—	—	—	—	4室外西	4室外西	4室	1934年陝西民政庁二門内院(西安市社会路) 発見。

番号	時代	年代	西暦	碑名	①1906年	②1908年	③1914年	④1935年	⑤1938年	⑥1946年	⑦2006年	備考
101	唐	開元6年	718	韋瑱墓誌	—	—	—	—	—	4室外西	6室外	1943年王子雲によって発掘
102	唐			韋瑱石槨	—	—	—	—	—	4室外西	4室	1941年王子雲が発見
103	唐	元和元年	806	慧堅禪師碑	—	—	—	—	—	5室西廊	3室	1945年西安飛行場発掘
104	六朝			白石造像	—	—	—	—	—	前院		1943～44発見か
105	唐			独孤氏墓誌蓋	—	—	—	—	—	前院		
106	唐	天宝		残石経幢	—	—	—	—	—	前院		1941～1942発見か
107	唐	永徽		褚書残石	—	—	—	—	—	前院		褚遂良書
108	唐	長安		趙府君墓誌(趙智備及妻宗氏墓誌)	—	—	—	—	—	弁公室	6室外	
109	唐	開元		吳道子觀音像	—	—	—	—	—	弁公室		吳道子画 明代摹刻 不明?
110	唐			心経(草書心経)	—	拓本	○	—	—	—	—	民国初期以降散逸 張旭
111				鴛鴦七志齋(385点)	—	—	—	—	8室	—	碑廊	1938年于右任寄贈。日中戦争中に地中に埋蔵。1947年掘り出し
112	後漢	熹平4年	175	熹平石経残碑	—	—	—	—	別置	—	3室	1929年洛陽大郊村出土 1938年于右任寄贈、のち日中戦争にて富平県・三原に疎開(不明)、1952年碑林に移設
113	後漢			武都太守等題名残碑	—	—	—	—	—	—	3室	1948年新城小碑林より移設。清乾隆44年陝西省華陰県華岳廟発見。
114	唐	垂拱4年	688	美原神泉詩序碑	—	—	—	—	—	—	3室	1948年新城小碑林より移設。陝西富平。
115	唐	開元13年	725	述聖頌碑	—	—	—	—	—	—	3室	1948年新城小碑林より移設。陝西華陰西岳廟。
116	唐	天宝元年	742	告華岳文	—	—	—	—	—	—	3室	1948年新城小碑林より移設。陝西華陰西岳廟。
117	唐	大曆14年	779	顏勤礼碑	—	—	—	—	—	—	3室	1948年新城小碑林より移設。1922年西安西大街社会路一带発見

注

- 1 村松弘一「西安の近代と文物事業—西京籌備委員会を中心に—」『近代中国の地域像』(山本英史編)山川出版、2011年参照
- 2 北宋「京兆府府学新移石経記」および明「重修孔廟石経記」等の碑文(西安碑林博物館蔵)による。呂大忠(生没年不詳)は京兆藍田の人、字は進伯。皇祐年間の進士、陝西華陰県尉・山西晋城県令を経て河北転運判官、陝西転運副使となる。この時、「石台孝経」「開成石経」を移動した。なお、碑林の創建については、1103年(宋崇寧2年)に虞策が府学・文廟・唐石経を府城の東南隅に移したという説もある(路遠『西安碑林史』西安出版社、1998年、68-70頁)。
- 3 関野貞(1868年~1935年)は明治~昭和初期の建築家・建築史学者。帝国大学工科大学卒業後、内務省・奈良県技師として奈良の古建築・平城宮跡を調査、東京帝国大学教授・東方文化学院東京研究所研究員をつとめる。1906年には清国に派遣され、中国建築を踏査、朝鮮半島へは1904年から調査に赴き、1910年以降は朝鮮総督府の依頼で毎年出張した。『支那仏教史蹟』(1925~1929年、常盤大定と共著)『朝鮮古蹟図譜』(1916年~1935年)など多数。
- 4 関野の日記の記事によれば、1906年10月29日・11月1日・2日・3日・11日の5日間、碑林の調査・写真撮影をおこなっている(関野貞研究会『関野貞日記』「明治39年 中国旅行日記」174-177頁、中央公論美術出版、2009年)
- 5 関野論文には碑林の展示空間の区分はなされていない。そのため、本文および表1では後述の資料④の区分に基づき、分類した。
- 6 足立喜六(1871年~1949年)は愛知県名古屋市千種区に生まれる。1898年、東京高等師範学校を卒業し、熊本県・茨城県・愛媛県・山梨県の高等小学校・中学校・師範学校などで教鞭をとる。1906年3月から1910年2月まで陝西高等学堂教習に数学・物理の教習として赴任し、1907年に桑原隲蔵と宇野哲人と出会う。帰国後は愛知県一宮町立高等女学校校長となる。退職後、1933年に『長安史蹟の研究』を刊行、その後は、『考証法顕伝』『法顕傳 中亞・印度・南海紀行の研究』『大唐西域記の研究』『大唐西域求法高僧伝』『入唐求法巡礼行記』を出版。『長安史蹟の研究』は1935年に上海で翻訳版が公刊され、その後も、1983年・2006年に日本語版の復刻、1990年・2006年に中国語版の復刻、2003年には中国語の新訳本も出版された。足立にとって、西安での経験が、退職後の東洋史研究者としての道を開いたと言えるだろう。村松弘一「清末西安の教育と日本人教習—足立喜六を事例に」『学習院大学国際研究教育機構研究年報』2号、2016年参照。
- 7 図2も図1と同様、展示空間の区分はないため、資料④の区分に基づき分類した。
- 8 宇野・桑原は、1907年10月4日に碑林に石碑が移送された現場を見たとき書き残している。桑原隲蔵『考史遊記』(弘文堂、1942年。のち、2001年に岩波書店より文庫化刊行)、宇野哲人『支那文明記』大同館書店、1912年、のち、2006年に『清国文明記』として講談社より文庫化刊行)参照。なお、村松弘一「清末西安の教育と日本人教習—足立喜六を事例に」『学習院大学国際研究教育機構研究年報』2号、2016年にも関連の記述がある。なお、盗難事件とレプリカのその後の顛末は以下に詳しい。桑原隲蔵「大秦景教流行中國碑に就いて」(『東洋史説苑』弘文堂書房、1927年、のち『桑原隲蔵全集 第一巻』岩波書店、1938年所収)、Michael Keevak "The Story of a Stele: China's Nestorian Monument and Its Reception in the West, 1625-1916" Hong Kong University press, 2008。
- 9 『雍州金石志』には、開福寺の仏殿前に杜順和尚行記碑ありというが、関野貞は1906年(明治39年)11月に西安府東北隅の開福寺を訪問し、寺域内をあまねく搜索したが発見できなかったという(関野貞・常盤大定『支那文化史蹟』法蔵館、1940年)。資料③④ともに1914年(民国3年)開福寺より移設とあるが、それ以前に関野が発見できなかったことから考えると、誤字の可能性もあるだろう。同じ民国3年に碑林に移設された、85「梵漢合文経幢」の碑林博物館の解説キャプションには開元寺からの移設とあり、これらはみな開元寺から運ばれたものとも考えられる。関野前掲書の開元寺の解説には「唐陀羅尼経幢」「唐仏頂尊勝陀羅尼幢」があるとあり、これらが84・86・87のいずれかである可能性も否定できない。

- 10 張知道(1905年~1963年)は陝西省華県の生まれ。家は貧しかったが楊松軒らの援助を受け、咸林中学・高中を卒業。南京中央政治学校を退学後、華県・西安で教鞭を執る。1933年西京図書館館長となり、『西京図書館蔵目録』『西京碑林』『図書館』を編集・刊行。1939年には陝西省民衆教育館館長に転じ、1947年には国立西安図書館の準備に参加するが、資金難のため開設できず、1948年に華県高唐中学校長、解放後も教師として教育に携わる。
- 11 1930年代初頭、南京国民政府では西北地区を貧困から脱却させることを目的とした開発西北論がわきあがった。1931年に設置された全国經濟委員会が主導して、水利建設・道路建設・衛生・農村建設を計画したが、結果的に具体的な成果を挙げるには至らなかった。1932年に組織された国民政府直属の西京籌備委員会では測量・林業・交通・名勝古跡の調査・西京指南の編集などより具体的な事業が展開され、1945年まで続いた。1932年の設置から1945年の廃止に至るまで、一貫して張継が西京籌備委員会委員長を務めた。張継(1882~1947)は現・河北省滄県の生まれ。1899年に日本に留学し、東京善隣書院、東京専門学校(早稲田大学)で学ぶ。1905年に東京で中国同盟会に加入。辛亥革命後、交際部主任兼河北支部長となり、1913年には参議院議長となる。1924年には国民党第一期中央監察委員となるも孫文と対立、1925年には西山會議派(国民党反共右派)に参加。南京国民政府成立後は司法院副院長兼北平政治分会主席、中央監察委員、立法院院長(就任せず)、西京籌備委員会委員長、国民党華北弁事処主任を歴任。1947年に国史館館長就任。
- 12 足立喜六『長安史蹟の研究』図版119。なお、足立書には他の5体の写真もあるが、これらはÉdouard Chavannes, Édouard Chavannes, "Mission archéologique dans la Chine septentrionale: vol.4" 1909より転載されたものである。
- 13 盧芹齋(C.T.LOO、1880~1957)は浙江省を原籍とする中国人で、1900年頃パリへ来た後、国民党元老張静江との連携と投資により、パリの中国大使館員と古美術品貿易会社を設立。経営した来遠公司是パリ・ニューヨーク・上海・北京に店舗を構え、各国の博物館に中国の文物を売却した。
- 14 六駿の海外流出については、これまでペンシルヴァニア大学関係者による文物の略奪とされてきたが、近年、博物館アーカイブズで、ニューヨークやパリ等に店舗を構えた国際的骨董商であったC.T.ルー(盧芹齋)と博物館館長Gordonとの間の書簡資料群が発見され、これによって中国人骨董商を通じて博物館がこの文物を「購入」したことが判明した。周秀琴「昭陵兩駿流失始末」『碑林集刊』8集、2002年、Xiuqin Zhou "Zhaoling: The Mausoleum of Emperor Tang Taizong", "SINO-PLATONIC PAPERS" Number 187, 2009年、および村松弘一「引き裂かれた唐昭陵「六駿」—ペンシルヴァニア大学博物館アーカイブズ資料から」『世界の蒐集—アジアをめぐる博物館・博覧会・海外旅行』(村松弘一共編)、山川出版社、2014年参照。
- 15 Bishop, Carl W "The Horses of T'ang T'ai-tsung." The Museum Journal IX, 3/4, 1918年。
- 16 陝西省図書館館史組編『陝西省図書館館史』陝西教育出版社、1989年30-34頁
- 17 前掲注(8) 宇野哲人『清国文明記』
- 18 「重修西安碑林記」(1938年。路遠『西安碑林史』581-585頁)参照。なお、委員の名列の筆頭は西京籌備委員会委員長の張継であり、顧問には陝西考古会委員長・張鵬一、西京図書館館長・張知道、陝西通志館館長・宋聯奎、西京金石書画会会長・寇遐、孔教会会長・張玉璽らが名を連ねている。
- 19 張鵬一(1867年~1943年)は陝西省富平県生まれ。涇陽味經書院に学び、劉古愚の『史記』『爾雅注疏』の校勘を手伝う。挙人となり、北京へ赴き、康有為の変法運動に参加。その後、陝西省富平にて文王廟小学堂を創設し、また、臨潼横渠書院にて教鞭をとる。1908年から山西省長治県代理知県・山西大学堂庶務長・中国銀行秘書長などを歴任。1914年には陝西督軍署秘書、陝西史治研究所所長、1916年には陝西通志局分纂、西安碑林を監修する。1930年には陝西省府顧問となり、1934年には国立北平研究院と陝西省政府が共同で設立した陝西考古会の委員長となる。陝西考古会は1934年から1937年まで宝鷄鬪鷄台戴家湾の発掘調査を行った。1937年には西北史学会理事長、西安碑林保管委员会主任となる。
- 20 于右任(1879年~1964年)は陝西省三原県の生まれ。震旦学院卒業後、復旦公学(復旦大学)を創設。1906年、日本に留学し、中国同盟会加入。帰国後、『神州日報』を創刊し、辛亥革命後の1912年には中

華民国臨時政府交通部次長となる。1918年には陝西靖国軍を組織。1922年には上海にて国立上海大学の校長、1926年には陝西省政府主席となる。南京国民政府成立後は、国民政府委員、軍事委員会常務委員、監察院院長、国防最高委員会常務委員などを歴任。南京国民政府の中枢にあった。碑林の「鴛鴦七志齋」を所蔵するなど、陝西省出身の文化人としても著名な人物である。

- 21 「1944年陝西省歴史博物館接收孔廟財産清冊」路遠『西安碑林史』435頁-441頁、参照。
- 22 路遠『西安碑林史』西安出版社、1998年参照
- 23 王子雲(1897年~1990年)は江蘇省徐州府蕭県生まれ。上海美術専科学校、国立北京美術学校にて学び、北京孔徳中学にて教鞭をとりつつ、アポロ美術学会に参加し美術研究に従事。国立西湖芸術院を経て、1932年、フランス国立パリ高等美術学院留学。日中戦争が始まった1937年に帰国し、国立杭州美術専科学校教授となる。1940年、西北芸術文物考察団を組織し、団長となる。1945年に考察団の事業を終え、国立西北大学歴史系教授・西北文物研究室主任となる。その後、国立成都芸術専科学校教授、西北芸術学院、西安美術学院教授を歴任。教育部西北芸術文物考察団は王子雲の建議に基づき重慶国民政府によって1940年6月に組織され、1945年8月まで活動した機関。組織され考察団の主要な調査は陝西関中漢唐陵墓調査、河南洛陽龍門石窟調査、青海塔爾寺參觀調査、敦煌莫高窟調査(壁画模写)、拉卜楞寺調査、河西回廊佛窟群調査、西安考古調査、蘭州考古など西北各所にわたる。設立から解散まで王子雲が団長をつとめた。
- 24 「張継為収集歴史資料復教育部芸術文物考察団公函」(1941年5月23日)西安市档案局・西安市档案館編『籌備西京陪都档案資料選輯』、西北大学出版社、1994年、220頁
- 25 路遠『西安碑林史』西安出版社、1998年
- 26 「西京籌備委員会工作報告」(1941年11月~1942年5月)前掲『籌備西京陪都档案資料選輯』、226頁-229頁
- 27 「西京籌備委員会工作報告」(1943年9月~1944年4月)前掲『籌備西京陪都档案資料選輯』、233頁-237頁
- 28 陝西省博物館編『陝西省博物館』(文物出版社、1983年)には、青銅器・壁画・秦始皇帝陵兵馬俑など、その後陝西歴史博物館に移管される文物が掲載されている。